沈黙か、詠嘆か？
―『敦隣』における武田泰淳の文芸評論の中国語訳について ―

趙　海霞

1．はじめに

武田泰淳（1912 年 -1976 年）は戦後派作家であり、1930 年代には中国文学の研究者として中国に紹介された。彼は多くの中国文学作品を翻訳したが、彼自身の著作の中国語訳に関する研究はあまり見られない。ところが、戦時下に掲載された文芸評論「中国と日本文芸」（『文藝』1943 年 7 月号）および「中国人と日本文芸」[1]（『国際文化』1943 年 9 月号）は、日本占領下の北京において発行された雑誌『敦隣』に翻訳、掲載されていることが確認された。それぞれ「中國與日本文藝」（『敦隣』、1944 年 9 月号）、「中國人與日本文藝」（『敦隣』、1944 年 3 月号）として掲載された。原作は周作人の文芸観について論じられ、何度も改題されたことがある。[2] さらに、先行論では二編に含まれる泰淳の日中比較文学論と私小説への視点も考察されている。[3]

日中戦争を経て太平洋戦争が勃発し、「大東亜共栄圏建設」というスローガンが広まる同時代言説の中で、二編の中国語訳は宣伝するイデオロギーに合致していないと考えられる。日中文芸交流における翻訳の様相へのまなざしや、周作人の日本文芸への「詠嘆」と魯迅の日本文芸への「沈黙」という対照的な態度は興味深いものと言えるだろう。戦時下における占領地域のマスメディアの文学表現は「抵抗」「協力」という二極的な評価軸が主流であるが、占領地区の文人は時代環境と家計の板挟みに直面し、詠嘆するか、沈黙を守るかという二者択一を迫られたことも想像できる。本論文は日本の傀儡政権である汪兆銘政権が統治した華北善隣会の機関紙である『敦隣』に掲載された「中国と日本文芸」「中国人と日本文芸」の中国語訳や日本文芸の翻訳を考察することで、戦時期の北京文壇のうち汪兆銘政権に与したとされた文化人の文学活動の様相を明らかにしたい。

2．『敦隣』に掲載された日本文芸の翻訳と紹介

『敦隣』は日本占領下汪兆銘政権が統治した華北善隣会の機関誌であり、出版地は北京にある。日中同盟条約に基づき、反共を掲げ、互いに自主独立を尊重し、「中日親善」という善隣関係を促進し、欧米文化の影響を排除し、英米に対抗し、東亜の新秩序を構築しようとする方針を掲げている。この

---

[1] 現時点では、「中国人と日本文芸」は匡伶によって翻訳され、「中国人与日本文芸」は『世界文学』（2021 年第 6 期）に掲載されていることが確認された。

[2] 『揚子江のほとり : 中国とその人間学』においては、「中国と日本文芸」は「周作人と日本文芸」と改題されている。「中国人と日本文芸」は昭和 19 年 9 月発行の『周作人先生のこと』（光風館）に収録の際、「周作人と日本文芸」と標題が変更された。『揚子江のほとり : 中国とその人間学』においては、「弟・周作人と魯迅」と改題されている。

[3] 伊藤徳也「武田泰淳における日中比較、私小説 ― 1943 年の二篇の周作人論から ― 」（『周作人研究通信第 12 号』、2021 年）1-14 頁。

月刊誌は1944年1月に創刊され、1945年2月までの13冊が現存していることが確認された。[4] 1945年1月号からは、印刷用紙の供給不足のため、合本版の刊行が予定されていた[5]が、結局1945年第2・3月号をもって廃刊となった。

華北善隣会の組織構造については、菊地俊介は「1943年2月日本当局に登録され」、「華北善隣会は現地の軍部、政界と密接な関係にある公的機関のひとつだった」[6]と指摘している。したがって、華北善隣会は日本の対外宣伝を支援する協力機関としての機能を果たしていたと考えられる。理事長は在北京日本大使館情報課長・華北翼賛會事務局長の三原敏男であり、常務理事には華北政務委員会情報局長の管翼賢がいる。『敦隣』に掲載される論文は日中双方の統治機構の要人が執筆しており、新民会中央総会副会長・事務総長喩熙傑も時折寄稿している。寄稿論文としては、三原敏男「神聖的善鄰工作」(1944年3-7月号)、管翼賢「昂揚中日善鄰真義」(1944年6月号)「我們要怎様敦隣」(1944年9月号)、喩熙傑「對共工作之檢討」(1944年3月号)「完成解放戦争奠定共榮之基」(1945年1月号)などがあげられる。要するに、『敦隣』は日本占領下の華北地域における日中支配機関の要人らの世論ツールとしての特徴がある。同時に、『敦隣』の編集者は文芸欄の設立に熱心であり、日本文芸への翻訳にも力を注いでいたと考えられる。

2.1 「雁」と「芭蕉俳句選訳」の翻訳と掲載について

『敦隣』は官製メディアとして、政治的にイデオロギー色が強いことは言うまでもないが、編集長である王真夫は創刊当初から、文学界の友人に協力を呼びかけ、文芸欄である「文園」を設ける予定があり、「文園」は1944年2月号から存在している。[7]その後、王真夫は「日本文学特輯」という欄を企画し、徐白林らに翻訳を依頼したが、「依頼した数人の翻訳者は承諾したものの、官職や商売に忙殺されていたため」[8]、この企画は失敗に終わった。1944年8月号から10月号まで「文園」という見出しはなくなったが、日本文学の翻訳は引き続き掲載され、11月と12月号では「散文」「詩」「小説」の欄が設けられた。しかし、1945年1月号と2・3月の合併号までその形式はほぼ変わらず、このことから、『敦隣』における日本文芸の翻訳があまり成功していなかったことがわかる。

『敦隣』に掲載された翻訳は、日本人寄稿者による日中歴史関係や「日中親善」について論じる論文の翻訳だけでなく、華北作家協会に所属する徐白林、王真夫、岳蓬などの文人による日本文芸の翻訳も行われていた。華北作家協会は1943年初春に『日本文学全集』を出版するという予定があり、その内容には松尾芭蕉集(白林訳)、森鷗外集(王真夫訳)、丹羽文雄集(柳龍光訳)、有島武郎集(共鳴訳)、川端康成集(辛嘉訳)、石川達三集(梅娘訳)が含まれていた。翻訳における優れた業績として、王真夫訳『雁』は尤炳圻訳『我是猫』と並んで、中国文化振興会の『日本文学選集』、梅娘訳『母親家族』とともに高く評価されていた。[9]「雁」の翻訳はおそらく『森鷗外集』の一部として行

---

[4] 1944年には第1巻第1期から第1巻第4-5期、そして第1巻第6期まで、さらに第2巻第1期から第2巻第6期まで、合計11冊がある。そして、1945年には第3巻第1期と第3巻第2-3期の2冊が現存している。

[5] 「編後記」(『敦隣』、1945年第3巻第1期)48頁。

[6] 菊地俊介「日本占領下華北における華北善隣会と機関誌『建設戦』・『敦隣』」(『立命館文学(667)』、2020年)1607-1620頁。

[7] 「編後隨想」(『敦隣』、1944年1月号)

[8] 「編輯隨想」(『敦隣』1944年4-5月号)

[9] 比目「華北文學一年」(『華北作家月報』、1942年12月第3期)第5頁。

われたのではないかと考えられる。1944 年に「雁」が『敦隣』に掲載される前に、王真夫訳「雁」は 1942 年に華北文化書局から発行された『万人文庫十月文園』にも掲載されている。『万人文庫』の「文園」は 1942 年 5 月から毎月 1 日に一冊発行され、1943 年『二月文園』を最後に休刊となり、全 10 冊が刊行された。『九月文園』『八月文園』などの一次資料を入手するこ とはできなかったため、王真夫訳「雁」がいつから連載されたかは考察できないが、1944 年に『敦隣』に掲載された「雁」の連載内容と、1942 年に『十月文園』に連載された「雁」の内容が重複していることが確認できた。

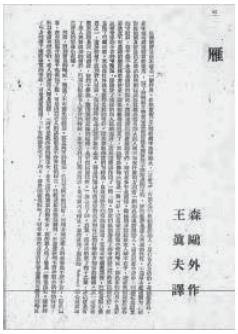

図 1　王真夫訳「雁」本文（『敦隣』1944 年 8 月号データベース「全国報刊索引」）

図 2　王真夫訳「雁」本文（『十月文園』1942 年データベース「全国報刊索引」）

つまり、翻訳者である王真夫は同じ翻訳作品を異なる雑誌に寄稿したのである。実際に、華北作家協会が『日本文学全集』を企画した一年後、『華北作家月報』は「会務動態」で「日本文学叢書がもうじき刊行する」と宣言した。結果的に、「全集」の翻訳計画は中断したが、王真夫訳「雁」、徐白林訳「芭蕉俳句選訳」などが『森鷗外集』と『松尾芭蕉集』の一部として、中国の読者に紹介された可能性があると考えられる。『敦隣』は文人の翻訳作品などを掲載する場としての役割を果たしていたのではないかと考えられる。筆者は「全国報刊索引」のデジタル資料を用いて『敦隣』に掲載された日本文芸の翻訳作品について調べた結果を表 1 にまとめた。

表 1　『敦隣』に掲載された日本文芸の翻訳作品の一覧表

訳名	翻訳者	原作者	掲載時期	巻号
芭蕉俳句選譯	徐白林	松尾芭蕉	1944 年	2 月号
				9 月号
日本人	王真夫	芥川龍之介	1944 年	2 月号
猿				4 － 5 月号
雁		森鴎外	1944 年	7 － 8 月号
肥皂	岳蓬	林芙美子	1944 年	11 月号
立秋所見		永井荷風		9 月号
我		芥川龍之介		10 月号
				11 月号
林芙美子歐行日記摘抄譯		林芙美子	1945 年	1 月号
青銅的基督	耳三	長與善郎	1944 年	12 月
			1945 年	1 月号、2・3 月号

表１は掲載された翻訳作品を示しているが、前述した『日本文学全集』は時運に恵まれず頓挫しているため、「芭蕉俳句選譯」や「雁」は断片的に掲載されている可能性が高いだろう。芥川龍之介や林芙美子の作品も翻訳、紹介されたが、それほど有名ではないと思われる作品が取り上げられた。また、翻訳者として、王真夫と岳蓬、徐白林はいずれも作家であり、華北作家協会の会員として登録されている。[10] 王真夫らは作家として、作品の掲載プラットフォームを求めており、『敦隣』が彼らにとってそのプラットフォームとしての機能を持っていると言える。一方で、「大東亜の共存共栄」を宣伝する色合いが強い官製メディア『敦隣』の編集者として、王真夫が編集した「中国と日本文芸」と「中国人と日本文芸」は宣伝臭いのかどうか、異色のある文章かどうかについて、考察を進めたい。まず、編集者である王真夫と岳蓬について論じる。

2.2　編集者・華北作家協会会員―王真夫と岳蓬

王真夫は 1944 年 9 月号まで『敦隣』の編集者を務めていた。『敦隣』は官製雑誌の性格を帯びている一方で、発刊の辞から早速「中国国民の立場」を強調している。「中国自身を健全に発展させ、中国国民の立場に立って、中国国民の忠実な代表者として活動することだ。」[11] という内容で、署名は目次に「編輯部」とあるだけだが、恐らく主筆である王真夫が書いたものであろう。

図３　王真夫
「寫在旅日之前」『華北作家月報』
1943 年第 8 期に掲載された肖像写真
（データベース「中国歴史文献総庫」）

王真夫はかつて「日本人のようだと日本人の友人に褒められると非常に不愉快に感じた。さらに「固執な国家観念」を刺激された」と述べている。「中国人という言葉が犬でも虫でも何でも同義語として使われるにもかかわらず、誇りをもって自分が中国人であると認め、中国人として生まれ、十分に成長させてくれなかった中国を愛している」[12] と告白している。「祖国愛」に関する記述は『敦隣』の別の記事でも見られる。紀徳を紹介する際に、「紀徳が必読書として推薦する書籍や作家はすべて自国のものである。これは彼の愛国心と民族的自負心を明確に示す」[13] と記されている。これらのことから、王真夫が民族的プライドを持つ文人であることがうかがえる。

王真夫は『敦隣』に自分の翻訳作品を掲載するだけでなく、華北作家協会の会員として、『華文大版毎日』、『中国文学（北京）』、『国民雑誌（北京）』、『新民報半月刊』、『華北作家月報』など、日本占領下の華北で刊行された雑誌にも寄稿している。中国国民の自尊心が強い文人としても、王真夫が編

[10]「華北作家協会会員録」（『華北作家月報』1942 年第 3 期）
[11] 編輯部「創刊辞」（『敦隣』、1944 年 1 月）6-7 頁。
[12] 真夫「旅日随想」（『敦隣』、1944 年 1 月号）59-60 頁。
[13] 紀徳作、真夫翻譯「作家的戒律」（『敦隣』、1944 年 3 月号）57-60 頁。

輯した『敦隣』には時局向けの論文が含まれていたが、「文園」欄と「今日の話題」欄を設立し、文人たちに思想表現のための比較的自由なスペースを提供することを目指していたのではないかと考えられる。日本占領下における言論統制など創作活動に多くの制約がある中、王真夫は二つのコラムの価値を特に強調し、これらの充実に努めており、言論空間を広げようとする姿勢も反映しているだろう。

1944 年 9 月号から編集者は岳蓬に交替し、岳蓬は「編者はかわっても精神と態度は全く変わらない」[14] と強調している。1944 年 11 月号には、1944 年 9 月 2 日に開催された「批評座談会」が掲載された。この会議は王真夫が主宰し、編集委員には岳蓬、劉潔心、陳綺勤の三人が名を連ね、出席者の中には関永吉、張丙幹、徐白林など華北作家協会の関係者も含まれている。岳蓬はこの席で、『敦隣』は真の中国人の立場から語られ、完全に媚日ではないと改めて強調した。[15] 当時、暗示的な表現は多く存在していることが容易に想像できるが、岳蓬は「今日的話題は『敦隣』の生命線であり、暗示的な表現での批判や謎めいた表現ではなく率直な言葉で意見を述べるべきだ。論文も検閲に影響されないほど強力な文章を書くべきだ」と告白している。文芸欄について、「日本文学を中心に紹介する予定があるが、日本文学を紹介するだけでなく、中国文学も日本に紹介する必要がある」といった提言も述べている。岳蓬自身が文人であり、文人の生活困窮は良く理解していることから、善隣会と何度も交渉し、[16] 寄稿人への原稿料をいくらか上げたことがある。

当時の政治状況下で、翻訳者は様々な苦労や悩みを抱えていた。原稿料の問題だけでなく、翻訳する内容も自分で決めるのが難しい状況であった。先述のように、王真夫の「旅日随想」という随筆は『中国文学（北京）』にも掲載されている。[17]「雁」は『敦隣』に掲載される前に、1942 年『万人文庫十月文園』で既に掲載されている。当時、同じ作品を複数の雑誌や新聞に投稿することは一般的であり、生計の問題を考えると、作品を複数のメディアに掲載することで追加報酬も獲得可能となるだろう。「不景気の時代には、編者も著者も読者もみんな苦境に立たされていた。現在、文人たちにとって未来がないというのは共通の宿命となっている」[18] と岳蓬は感歎した。作家の楊丙辰も、一方では「原稿料が高騰に追いつかないことに辛さを感じ、他方では作品の翻訳に大きな自主権がなく、翻訳したい作品が必ずしも出版されるわけではなく、自分が翻訳したくない作品を翻訳せざるを得ないこともある」[19] と嘆いた。

『敦隣』の投稿規定からわかるように、原著の書名、原著者、出版年月、出版地は翻訳が採用されるかどうかの重要な判断基準であることが分かる。投稿作品については、編者の判断により削除または修正する権利がある。[20] 翻訳者自身の翻訳動機は十人十色であり、個人の翻訳者が作品を翻訳、紹介する際に、時宜にかなったケースがしばしばある。『敦隣』は日本文化機関の植民支配の影響を受け、形式的には当局との密接な連携が避けられないが、王真夫をはじめとする占領地域の北京の文人たちは積極的に日本文芸を翻訳し、紹介することで何かを主張しようとしたと考えられる。そのため、

---

[14]「編後記」（『敦隣』、1944 年 9 月号）
[15]「批評座談會」（『敦隣』、1944 年 11 月号）53-56 頁。
[16] 編後記（『敦隣』、1944 年 9 月号）
[17] 真夫「旅日随想」（『中国文学（北京）』、1944 年第 1 巻第 1 期）65-66 頁。
[18]「編後記」（『敦隣』1944 年 12 月号）
[19] 楊丙辰「我爲什麽要做翻譯的工作」（『中国文学（北京）』、1944 年第 1 巻第 9 期）41 頁。
[20]「月刊「敦隣」稿約」（『敦隣』、1944 年 1 月号）32 頁。

『敦隣』に掲載された「中国と日本文芸」「中国人と日本文芸」の中国語訳を取り上げ、これを分析しながら考察を進めたい。

3.「中国と日本文芸」「中国人と日本文芸」の中国語訳

「中国と日本文芸」「中国人と日本文芸」は評論として『武田泰淳全集第十一巻』（筑摩書房、1971年）に収録されている。しかし、『敦隣』の編者はこれらの二編の中国語訳を「文園」欄に入選させず、むしろ「大東亜共栄圏建設」のための「日中善隣」とか、「日中文化交流」を宣揚する「論文」として扱っているように見受けられる。「文園」欄には主に日本文学の翻訳や、中国文人の書いた随筆や小説が掲載されており、「論文」のように政策を宣伝するのではない。二編の中国語訳のタイトル「中國與日本文藝」「中國人與日本文藝」だけを見ると、『敦隣』に掲載された日本文化の優越性を広め、大東亜戦争を通して東亜の各民族を解放したと宣揚した「論文」に属しているように思われるが、詳細な分析を行い、その性格を明らかにしていきたい。

『敦隣』1944年3月号に掲載された「中國人與日本文藝」の翻訳者は野雀である。1944年9月号に掲載された「中國與日本文藝」の翻訳者は倪爾生である。『敦隣』に作品が掲載された他の日本の作家、例えば、武者小路実篤や実藤恵秀、森鷗外などと比べると、当時の中国では武田泰淳はほとんど無名であったと言えるが、彼は中国文学を研究する作家として何度も紹介された。例えば1935年には左翼の作家が創刊した「雑文」という雑誌で、武田泰淳は中国文学研究会の同人として紹介され、[21] 1937年には『日本面孔』という雑誌でも、武田泰淳は研究に没頭し、ほとんど論文を発表せずに中国文学を紹介した作家として紹介されている。[22] 1944年頃に、武田泰淳は『司馬遷・史記の世界』（1943年、日本評論社）を書き上げたが、当時彼はほぼ小説家ではなく、中国文学の研究家として中国に紹介されたと言えるだろう。また、翻訳者の二人とも後世に名を残しておらず、今日では身の上を突き止めることも難しい状況である。筆者は「全国報刊索引」のデジタル資料を用いて調査したが、倪爾生と野雀の翻訳作品は表2に掲げたようなものがある。

表2　倪爾生と野雀の翻訳作品一覧表

翻訳者	訳名	原作者	掲載誌名	掲載時期	巻号
倪爾生	中國與日本文藝	武田泰淳	敦隣	1944年	9月号
	美術鑑賞底原理	長谷川如是閑	青年文化・吉林新京	1945年	第2巻第9期
	文藝：維也納城里的一隻臘燭	A.C.Cronin	吉林婦女	1947年	第1巻第1期
野雀	中國人與日本文藝	武田泰淳	敦隣	1944年	3月号
	中日事變與中日的國民性	賽珍珠	敦隣	1944年	1月号
	日本人	芥川龍之介		1944年	2月号
	關於魯迅	増田渉		1944年	4－5月号

[21] 宣「雑訊：日本的中國文學研究會」（『雑文』、1935年）40頁。
[22] 楔子「与増田渉雑談」卜少夫著『日本面孔』（上海：国民出版社、1937年）142-143頁。

両翻訳者ともに欧米の作品も翻訳しており、高い語学力を持っていたと推測できる。また、野雀の翻訳作品は政策を唱えるものではなく、倪爾生の翻訳作品には、政治から一定の距離を保つという感じがある。倪爾生訳「中國與日本文藝」および野雀訳「中國人與日本文藝」の特徴に注目して分析したい。

3.1 「中國與日本文藝」:「翻訳戦略」へのまなざし

二編の原作は周作人論として読み取られ、時局に合わせたアジテーションとして書かれていた[23]という指摘があるが、作品の中に含まれる当時の翻訳の様相への認識も注目すべきと考えられる。戦時下、日本政府は日本文学の海外進出を促進するために、翻訳を「戦略」として重要視していた。太平洋戦争中における日本文学作品を共栄圏に翻訳、紹介した主な目的は、言うまでもなく日本軍政のプロパガンダであったと認知されている。[24] こうした背景を踏まえ、訳作を原作と照らし合わせて分析することで、中国の文人たちの日本側が提唱した「翻訳戦略」に対する認識を考察してみたい。

1）関心を惹く惹かぬにかかわらず、この問題（中国と日本文芸の問題―筆者注）は今後の東方文学の運命にかかわる深さと大きさを持っているから、やがては日本文学者一人残らずの問題となると予言してもさしつかえない。単に両国作品の相互翻訳という形式的な交流ではなくて、**文学の本質**が動き合うという驚きが、この問題にはふくまれている。（「中国と日本文芸」『文藝』1943 年 7 月号、44 頁、下線部および太字は筆者による。以下同じ。）

中国語訳：

不管其能惹起關心與否，這問題是關係於今後東方文學的命運既深且大，所以難豫言以爲是今後日本文學者全體的問題，亦非過言。不単是所謂两国作品互相翻訳的形式底交流，而這个問題，却是包含着**文学之本質**的**交感**的頂點。（「中國與日本文藝」『敦隣』1944 年 9 月号、65 頁）

中国語訳を日本語へ再翻訳してみると、以下のようになる。

関心を引き起こすかどうかにかかわらず、この問題は東方文学の運命に関係し、深く大きなものであるため、日本文学の研究者全体に関わる問題であると予言することは過言ではない。単なる両国の作品の相互翻訳という形式の交流だけでなく、**文学の本質**における**交感**の頂点が含まれる。

「文学の本質が動き合うという驚き」について、これが遠回しの表現ではないかと考えられる。それに対して、翻訳者は自分なりに「文学之本質的交感的頂點」に翻訳したと考えられる。中国語の「交感」は「お互いに感応する」[25]という意味を持ち、相互に影響し合うということを指している。訳者は、翻訳が文芸交流の方法として単なる形式にとどまらず、日本側の単一方向の進出ではなく双方向の対話が求められ、文学の本質に踏み込むことを呼びかけたのではないかと考えられる。しかし、戦時体制下において、日本の文学者や文学研究者などは国家体制に組み込まれ、「国策文学」に迎合したのは当時の現状と言えるだろう。また、「大東亜共栄圏建設」のスローガンのもと、美しく優れ

[23] 伊藤徳也「武田泰淳における日中比較、私小説 ― 1943 年の二篇の周作人論から ―」（『周作人研究通信第 12 号』、2021 年）1-14 頁。
[24] 五味渕典嗣『プロパガンダの文学―日中戦争下の表現者たち』（東京：共和国、2018 年）
[25] 大東文化大学中国語大辞典編纂室　編『中国語大辞典上』（東京：角川書店、1994 年）1516 頁。

た日本文化を正しく海外に知らしめるという方向性が示されていたため、日本の文学作品の海外向け翻訳の選定は政策の一環として行われていた。[26] 近代になると、「華」と「夷」、「文明」と「野蛮」の構図が逆転された。中日文化の地位も逆転されたため、中日が対等の立場で文化交流ができないという状況下では、占領地域における翻訳において、文学の本質に触れ、「平等」を求める「日中文学交流」に関わる重要な問題も潜んでおり、翻訳者はそれを訴えているのではないかと考えられる。

2）龍之介の繊細な神経にとっても、春夫の頑丈な詩情にとっても、「支那」が素材であったばかりでなく、自己の文学をたかめる糧となっていることを、この際もう一度考え直す必要がある。（中略）中国と日本文芸の問題が、作品翻訳にかぎられ、よそよそしい儀礼にとどまってしまうのである。（「中国と日本文芸」『文藝』1943 年 7 月号、46 頁。）

中国語訳：

即使以龍之介的纖細的神經，即使以春夫的頑丈的詩情，而“中国”並不只是一箇素材，而是增長自己底文學的糧食，這件事現在應該再重新思考一下。是故中國與日本文藝的問題，只限於作品的翻譯，那是會止於疏遠的禮儀上面的。（「中國與日本文藝」『敦隣』1944 年 9 月号、67 頁）

中国語訳の日本語訳：

龍之介の繊細な神経であっても、春夫の頑丈な詩情であっても、「中国」が単なる素材ではなく、自分の文学の糧になっていることを、いま再び考え直すべきである。したがって、中国と日本文芸に関する問題は、ただ作品の翻訳に限られ、それは疎遠な礼儀の上に止まってしまう。

間違いなく翻訳者の翻訳戦略は依然として直訳である。直訳により、原作の言葉遣いや表現が最大限に復元することができる。「止於疏遠的禮儀」は翻訳という形式だけでは、日中文芸の親密な交流はあり得ないという意味を示唆しているのではないだろうか。

3）しかも、かくも重要なことは想い浮べることなしに、一応は日華文芸の交流を語り、日本文芸の中国への紹介を叫ぶのである。しかし平面的な交流が無意義なことは、周作人の場合だけをもってみても、明らかである。

中国語訳：

而且，沒有想到如此重要的事情，便要**粗枝大葉地**談論着中日文藝之交流，喊着向中國介紹日本文藝。然而平面地交流之無意義，僅以周作人的場合觀之，已很瞭然。

中国語訳の日本語訳：

その上、このような重要なことを考えずに、中日文芸の交流を**大雑把**に論じ、日本文芸を中国に紹介しようと叫ぶ。しかし、平面的な交流は無意味であることは、周作人の例だけを見れば明らかである。

太平洋戦争期、「日中文化交流」は大東亞文化事業の一環として繰り返し提唱されていたが、翻訳者は「一応」を中国語の「粗枝大葉」に翻訳した。この二つの表現には微妙なニュアンスの違いがあり、日本語の「一応」には「一時的」という意味を含むのに対して、中国語の「粗枝大葉」は日本語に翻訳されると、「大ざっぱ、大まか、いいかげん」[27] という意味がある。中国語ではマイナスなニュ

[26]「日本文学の南米進出」（『國際文化』、1940（8））38 頁。

アンスがあり、「粗枝大葉」が選ばれ、翻訳されたことは訳者が当時の「日中文化交流」の現状に対して批判的な見方が読み取れるのではないかと考えられる。また、平面的な交流と前述した形式的な交流は異曲同工であると言えるだろう。

4）「中国」が日本文芸の問題になることは、決して一時の政策方便ではない。「日本」が中国文芸の問題になることは、興奮や先走りのためではない。もっと幻想的な、未来的な気持ちで、この問題に臨まなければ、せっかく盛り上がった気運も、このまま凝固してしまうのであろう。支那を書き、支那人を書くことが、日本作家の**義務観念**ではなく、**文学そのもの**の対象とならねばならぬことは申すまでもない。

（「中国と日本文芸」『文藝』1943 年 7 月号、46 頁）

中国語訳：

“中国”成為日本文芸的問題，決不是為了一步政策的方便。而“日本”成為中国文芸的問題，也不是因為興奮或者○○。總要以更幻想底的、未來底心情，去着眼於這個問題，則這好容易盛起來的氣運，也將會這種凝結下去吧。寫中國、寫中國人，不是日本作家的**義務觀念**，那必須是**文學本身的對象**，自不庸言。（「中國與日本文藝」『敦隣』1944 年 9 月号、67 頁）

中国語訳の日本語訳：

「中国」が日本文芸の問題になることは、決して政策の方便のためではない。「日本」が中国文芸の問題になることも、興奮や○○からではない。もっと幻想的、未来的な気持ちで、この問題に着眼しなければならない。せっかくの機運も、このように凝縮していくだろう。中国を書くこと、中国人を書くことは、日本の作家の**義務観念**ではなく、文学そのものの対象でなければならないことは言わずとも分かる。

この翻訳テクストにおいて、翻訳の欠落が見られる。「この問題に臨まなければ」は翻訳されなかった。また、「先走り」の中国語訳は雑誌が破損しており、読み取ることができないため、○○で表示している。このテクストにおいては、中日文芸に関する問題は政策によるものではないと明示的に指摘していると考えられる。日中戦争が始まり太平洋戦争に入って以来、日本文化を宣揚し、国策高揚の意図をもって戦争を賛美した国策文学が最高傑作として認められ、多くの日本の作家も国策に順応し活動しなければならない。従軍作家たちによる現地報告の文章では、国家にとって都合のいい真実を報じることが求められた。後に太平洋戦争の開戦につれて、日本の作家は様々な文学団体を結成し、これらの団体は「言論報国」という「義務観念」によって時局に協力する集団としての性格をますます強めていった。国策文学を先頭に、戦時中におけるその文学は非文学へと転落していった。戦時下、「精神の低迷から脱し得ぬ中華民国の如き国に対しては、若々しい精神を以て彼等を刺戟し、共に大東亜建設の使命に進ましめようとする」[28]ために、日本文学の海外進出が盛んに行われてきた。日本の作家はこの大東亜文化事業に組み込まれ、つまり一種の「義務観念」に強いられただろう。

戦時下において、日本と中国は日本文学作品の海外向け翻訳に対して、策略や方針に相違点がある。日本政府側は、海外向けの翻訳、紹介すべき文学作品は「戦争体験から生まれた戦記の中には、純粋

[27] 小学館、北京・商務印書館編集『中日辞典第 2 版』（東京：小学館、2003 年）254 頁。
[28]「本会報告：海外向文学作品選定に就いて」（『國際文化』（27 号）、1943 年）94-96 頁。

な文学作品の傑作に劣らず、且厳しい現代に生きる日本人の若々しい精神が具現されている」[29] ものである。これに対して、前節で論じた『敦隣』に掲載された日本文芸の翻訳などと対照することで、中国の占領地域における純粋な日本文学への翻訳は実態の一端と言っていいだろう。敢えて言えば、日本占領下の北京の文人たちは「文芸そのもの」に注意しながら翻訳という営為を行おうとしても、当時の政治から離れて文学の独立性を認め、露骨な反骨精神や抵抗の精神を前面に出すことは無理であろう。しかし、彼らは日本文芸の翻訳を通して、「中國與日本文藝」から読み取れるように、直訳に忠実で原作の含意を尊重することで、沈黙のうちに「文学そのもの」や「文学の本質」について考え続けている。

3.2 「中国人與日本文芸」：詠嘆と沈黙という二つの態度から

異民族による支配という特殊な環境下で、占領地域の文人たちは「言 vs 無言」という二律背反の選択に直面している。日本文芸が中国大陸に紹介される場合、少なくとも中国人がそれをどのように受け入れるかを考慮する必要があると武田泰淳は書いている。「中国人と日本文芸」では、魯迅と周作人の日本文芸観がはっきりと対照的になる。二人の日本文化、文学観について、竹内実も「弟の周作人とは対照的に、魯迅は日本文化の専門家にならなかった。魯迅は日本文化に対する評価が高くない。彼は日本文化を研究対象として選ばず、文学家の立場からも日本文学に関心を示さなかった」[30] とされている。武田泰淳と竹内実の二人の中国文学研究者はこの点で類似した見解を持っているとも言える。

1）今私達が、日本文芸の大陸進出を唱うるならば、少なくとも兄弟両様の態度に面接することを予想せねばなるまい。美に対する詠嘆と、暗鬱なる沈黙である。（中略）日本文芸が光輝燦爛として進出するとすれば、進出の対象は漠然たる中国人ではなく、中国愛国青年であらねばならぬ筈である。周作人詠嘆の背後に、魯迅沈黙の背後に、黒圧々として群がる愛国的中国文芸青年が、詠嘆を発するや、沈黙を守るや、今その触発の機は到来しつつある。（「中国人と日本文芸」『國際文化』1943 年 9 月号、81 頁）

中国語訳文：

現在我們倘若提倡日本文藝的大陸進出，至少也是不能不預想遭遇兄弟兩樣的態度的：對於美的詠嘆和暗鬱的沉默。（中略）日本愛國青年的文藝倘若能以光輝燦爛得進出大陸，則進出大陸的對象該不是漠然的中國人，而是中國愛國青年。在周作人詠嘆的背後，在魯迅沉默的背後，黑壓地擁集着的愛國的中國文藝青年，將發詠嘆，將守沉默，現在是到來了那觸發的機會了。（「中國人與日本文藝」『敦隣』1944 年 3 月号、39 頁）

訳し戻し：

現在もし日本文芸の大陸進出を提唱するならば、少なくとも兄弟両名のような異なる態度に遭遇することを予想せざるを得ない：美に対する詠嘆と暗い沈黙。（中略）日本文芸が輝かしく大陸に進出すれば、進出の対象は漠然とした中国人ではなく、むしろ中国の愛国青年であるはずだろう。周作人の詠嘆の背後に、魯迅の沈黙の背後に、愛国心に燃える中国の若者たちが

[29]「本会報告：海外向文学作品選定に就いて」（『國際文化』（27 号）、1943 年）94–96 頁。
[30] 竹内実「魯迅的日本文化、日本文学観」（『魯迅研究動態』(11)、1986 年）32–33 頁。

黒々として寄り集まり、詠嘆を発し、沈黙を守り、今こそその触発の機会が到来しているのである。

武田泰淳は魯迅と周作人の日本文芸観を比較し、日本文芸が中国に進出する際の中国人の態度を予想している。その進出対象は文学を政治手段とする傀儡政府の支配下にある自己の思想などを持たない「漠然たる中国人」ではなく、むしろ「中国愛国青年」が対象であるべきと書かれている。「漠然たる中国人」と「中国愛国青年」の日本文芸への態度は書かれていないが、魯迅と周作人の日本文芸に対する態度を前提として、それぞれがどのような姿勢を示すのかを読者に想像させるのではないだろうか。

さらに、原作者の武田泰淳でも、訳者でも、中国人に日本文芸を受け入れさせるためには、政策や宣伝などではなく、お互いに誠実な交流に基づく必要があると明確に述べている。『小説月報』特輯号においては芥川龍之介の訃報を紹介したりすることで、真の文芸は政治的な宣伝を必要とせず、お互いの誠実な心で通じ合うことができると強調されている。

2）かつて『小説月報』は芥川龍之介の死に際し、特輯号を世に送った。勧誘によるものでもない。政策によるのでもない。中国文芸精神は、芥川の死を記念し、彼の作品に対する限りなき愛着を示したのである。文芸の道には方策を必要とせず、技巧を必要とせず、宣伝企画を必要とせぬ。欠くべからざるは誠実な信念あるのみ。日本作家の自己作品に対する誠実なる信念は、いつか必ず、暗鬱なる沈黙を破り得るのである。彼らがうけつぐ美の世界が、真実、美であるならば、隣国の詠嘆を呼びうるのである。日本現実に処する愛国青年の若々しい美しさに、ふさわしさがあるところ日本文芸は再びいくかの特輯号を、中国雑誌に期待できるのである。日本文芸を信じる心は、日華文化交流を唱える識者達の間にも、案外稀薄とみとめられる今日、私は誠実なる信念を特に第一としたいのである。（「中国人と日本文芸」『國際文化』1943 年 9 月号、81 頁）

中国語訳：

昔者 [小説月報] 黨芥川龍之介死時，曾向世間發出了特輯號。既非由於勸誘，也不是因爲政策。是中國文藝精神，紀念芥川之死而對他的作品表示了無限的愛著。文藝之道是不需要方策，不需要技巧，不需要宣傳企劃的。不可缺少的只有誠實的信念。日本作家對於自己作品的誠實的信念，不知幾時一定會打破沉鬱的暗默的。他們所繼承的美的世界倘若真實而美是能喚得起鄰國的詠嘆的。（中略）信任日本文藝的心，在倡導中日文化交流的識者們之間尚意外稀薄的今日，我想是該黨特別以誠實的信念為第一要項的。（「中國人與日本文藝」『敦隣』1944 年 3 月号、39 頁）

訳し戻し：

昔『小説月報』は芥川龍之介の死に際に特集号を発行した。勧誘によるものでもない。政策によるものでもない。中国文芸の精神が芥川の死を記念し、彼の作品に対する無限の愛情を表現したのである。文芸の道は方策を必要とせず、技巧を必要とせず、宣伝企画を必要とせず、不可欠なのは誠実な信念だけである。日本の作家が自分の作品に対する誠実な信念はいつか沈黙を打破することができるだろう。彼らが受け継いできた美しい世界が真実と美である場合は隣国の称賛を引き起こすことができる。（中略）日本文芸を信頼する心は、中日文化交流を提唱

する識者の間でもまだ意外に希少な今日、私は特に誠実な信念を第一要項とすべきだと考える。

当時の指導者たちは、人心収攬策としての文化工作を宣伝し、宣撫工作を重要視していた。宣伝される所謂「日中文化交流」も、形式的なものに過ぎないことが多いとされている。日本文化の「優秀性」が他者に押し付けられ、東亜に新しい文化を構築するために、「日本は中国と協力し、中国の新文化を創造することが広く共有されていた一般的な見解であり、これが日本文化の核心精神であり、最も意義深いものである」[31] とされた。しかし、当時の占領地域では、占領区の文人は中日文化交流について独自の見解を提出し、戦争の発生と文化の間に密接な関係があると考えていた。[32] 例えば、華北駐屯軍報道部、武德報社に属し、「純文芸」方針を掲げる『中国文藝』の編集者張深切はこの責任と義務を率先して引き受け、『中国文藝』に日本文学の現状について紹介する文章と関連作品の翻訳を増やし始めた。このようなケースは占領地域でも独立した思想で誠実な信念を以て文芸の本質を思考する文人もいることを説明しているだろう。

以上の二編の中国語訳を考察し、中国語訳を日本語へ再翻訳してみた結果、翻訳者は直訳で原作の情報をできるだけ忠実に伝達することがわかる。武田泰淳の戦時体制下の文芸政策に対する態度はさておきながらも、訳者は日本側の提唱した日本文学の海外進出のための「翻訳戦略」や、「日中文化交流」の本質に対して、王真夫の主張した「中国人の立場」で反対しているのではないかと考えられる。さらに、直訳という翻訳方法を用いたからこそ、訳者は原作者の潜んだ意図を受け取っただろう。敢えて言い換えれば、武田泰淳の非協力の態度も垣間見るのではないかと考えられる。

3.3 『敦隣』における「日中文化交流」の異色

太平洋戦争下の日本では「大東亜共栄圏」の建設が掲げられ、それに伴い「日華文化交流」というスローガンが一層促進されていた。例えば、『文藝』（1943 年 7 月号）と『國際文化』（1943 年第 26 号）は「日華文化交流」という特輯号を作成した。戦時下の占領地域における文学の翻訳や文化交流などは、「大東亜建設」の枠組みに組み込まれた。1943 年 6 月 20 日、華北作家協会の春季大会では、「東亜の新文学を構築するためには、中日の文学者が協力する必要がある」との提案がなされ、「設置中日文学翻訳懇談会案」決議案が採択された。これは文学翻訳が「大東亜建設」の一環として位置づけられたことを意味しているだろう。しかし、日本政府の構想は期待された成功を収めなかったと言えるだろう。

林房雄は 1944 年に、中国の高校生が読んでいる文学書籍は「重慶や延安系の作家の作品を除けば、大部分は英米系の翻訳小説である。日本文学の翻訳がほとんどないことを認めざるを得なくなった」[33] と述べている。飯塚朗も『貝殻』が「大東亜文学賞を受けたが、そのときその小説の内容を知っている関係者は何人いたか」[34] と反問している。大東亜文学賞は、第一回大東亜文学者大会に参加した作家代表によって提案されたもので、その目的は「大東亜文学」の精神と要求に合致する作品を称賛し、

[31] 現佐藤三郎作、明之訳「近代中國與日本文化」（『敦隣』、1944 年 2 月号）18 頁。
[32]「卷首語」『中国文藝（北京）、1940 年第 1 卷第 5 期』
[33] 林房雄、岳蓬訳「新中國文學運動」（『中国文芸』、第 9 卷第 1 期）第 40 頁。
[34] 飯塚朗「忠言于新中國文學」（『敦隣』、1944 年 3 月号）40-41 頁。

より多くの「大東亜文学」の建設に寄与する作品の創作を奨励することである。第二回大東亜文学者大会で初めて「大東亜文学賞」が授与され、上海の予且と北京の袁犀が受賞した。袁犀の受賞作は長編小説『貝売』である。しかし、同時代評は作品の内容から見ると、「明確な親日的な要素が見られない」とされている。[35] 中国文学研究者の飯塚朗は当時、この作品の内容が「大東亜文学」とは何の関係もないことに気付いたと見ていいだろう。

占領地域の「日中文化交流」の現状について、『敦隣』に掲載された「論文」から読み取れる。「文化交流の現状というのは唾棄すべきものでしかない」「文人たちは自ら何の理念も信念も持たない亜流の文化人」しかない。「大東亜文学者大会に出席したことのある方も単に飲んで、食べて、会話を楽しむために集まる」[36] といった文化交流の実相もわかった。

上述の分析から明らかなように、『敦隣』に掲載された論稿の大部分は「国策順応」という姿勢が見られるが、日本占領下の言論統制の中で、「大東亜文学」や「日中文化交流」と呼ばれるものに対する異議も『敦隣』に散りばめられている。これは日本軍部が大東亜文学を確立し、「共栄圏」の理念を徹底しようとした一方で、現実は順調に進んでいないことを示しているのではないかと考えられる。

4．むすびに

本論文では、主な資料として用いた『敦隣』に掲載された「中国與日本文芸」「中国人與日本文芸」および日本文芸の翻訳をならびに考察した結果、いくつかの興味深い点が明確になった。

『敦隣』は官製メディアとして、掲載された「論文」はほぼ「善隣工作」と呼ばれる宣撫工作に携わったが、「中國與日本文藝」「中國人與日本文藝」という二編の「論文」は独自の性格を持っていることがわかる。これは編集者である王真夫の「中国人の立場」の密かな表現ではないかと考えられる。王真夫は『敦隣』の編者を務めており、一定のプロパガンダを許容、隠忍しながら、文人として自身の作品を投稿する場を確保するほかなかった。

「大東亜文化事業」に対して、一部の中国の文人は「詠嘆」の姿勢を示しているが、「沈黙」を守る文人も存在した。「中國與日本文藝」と「中國人與日本文藝」はその事業を宣伝するような「論文」としての性格が薄く、日本文学の海外進出のための「翻訳戦略」や「日中文化交流」に対する見方はあまり時流に乗っていないと言える。そのため、「中国人と日本文芸」の一編は戦時下だけでなく、現代にいたるまで日本文芸を理解する優れた資料として、中国語に翻訳され、中国で鑑賞されている[37] だろう。当時、占領地域で厳格な検閲制度が実施されていたため、文人たちが直接に政治的見解を表明できないことは、ある種の「沈黙」と見なされる可能性がある。しかし、このような二編の中国語訳の掲載により、占領地域における中国の文人たちの非協力のあらわれとして把握できると考えられる。こうして政治から距離を置きつつ、文学の独立性を主張しようとした彼らの姿勢も浮かび上がっ

[35] 上官筝「哀犀論」（『中国文芸』、1943 年第 9 巻第 3 期）第 4 頁。
[36] 菅原俊「文化的否定」（『敦隣』、1944 年 3 月号）40 頁。
[37]「中国人と日本文芸」は匡玲により、『世界文学』（2021 年第 6 期）に翻訳、紹介されている。『世界文学』は 1953 年 7 月に創刊され、中国社会科学院外国文学研究所が主宰し、外国文学を紹介する雑誌である。

てきたであろう。

注釈

新聞と雑誌は「全国報刊索引」（https://www.cnbksy.cn/）、書籍は「中国歴史文献総庫」（http://mg.nlcpress.com/library/publish/default/Login.jsp）のデータより整理した。

参考文献

華北善隣会『敦隣』1944 年 1 月号～ 1945 年 2 － 3 月号
國際文化振興会『國際文化』1940 年～ 1944 年
改造社『文藝』1943 年 7 月号
伊藤徳也「武田泰淳における日中比較、私小説 ― 1943 年の二篇の周作人論から ― 」（『周作人研究通信第 12 号』、2021 年）1-14 頁
菊地俊介「日本占領下華北における華北善隣会と機関誌『建設戦』・『敦隣』」（『立命館文学（667）』、2020 年）1607-1620 頁

付記

本稿の引用文は全て筆者訳である。「中国人と日本文芸」のテクストの引用は『國際文化』（国際文化振興会、1943 年 9 月）に拠り、「中国と日本文芸」のテクストの引用は『文藝』（改造社、1943 年 7 月）に拠った。各種資料の引用に際し、旧字は新字に改めた。

Silence or Admiration?
Regarding the Chinese translation of Takeda Taijun's Literary Criticism in *Dunlin* magazine

ZHAO HAIXIA

The literary critiques written by Takeda Taijun (1912-1976) during the wartime period, titled *China and Japanese Literature* (published in *Bungei magazine*, July 1943) and *Chinese People and Japanese Literature* (published in *Kokusai Bunka magazine*, September 1943), have been confirmed to have been translated and featured in a magazine called *Dunlin*, which was published in Beijing under Japanese occupation.

Amid wartime censorship, some intellectuals adopted an "admiration" stance, while others opted for "silence". There's a distinct sense that these two Chinese translations didn't align with the propagandist ideology of the time. It is plausible that they were expressing their views on the translation strategy for the overseas promotion of Japanese literature advocated by the Japanese military and on the topic of "Japan-China cultural exchange". This sheds light on the diverse dimensions of literary activities and the various facets of translated literature by intellectuals operating in the occupied territories.